

表紙 鯉 高橋由一筆
解説は29ページ参照
題字デザイン・桑山弥三郎
カット・林美紀子

もくじ

鳥と文化、その復権について……………中西悟堂……4

文化財保存修復国際研究集会……………関野 克……6

——木の保存——

東京国立近代美術館工芸館の開館……………杉原信彦……8

国立民族学博物館の役割と意義……………佐々木高明……11

計量法と文化財……………伊藤延男……14

文化庁ニュース

昭和52年度(第32回)芸術祭

芸術祭大賞・同優秀賞決まる……………16

日本芸術院新会員の紹介……………18

芸術文化指導者の派遣について……………18

ドイツ・ロマン主義絵画の巨匠

「フリードリッヒとその周辺」展……………19

史跡の指定等

——文化財保護審議会の答申——……………20

記録作成等の措置を講ずべき

無形の民俗文化財の選択について……………22

公開講座「日本語と日本語教育」……………23

民俗歳時記シリーズ 2月

初午の行事について……………吉田清美……24

文化財保護法教室(15)

埋蔵文化財(Ⅲ)……………26

美術館・博物館・文化施設めぐり⑨

東洋の古美術品の出光美術館……………30

国立劇場ニュース……………31

東京国立近代美術館工芸館の開館



杉原 信彦

(東京国立近代美術館工芸館長)



我が国の工芸には、世界に誇るべき伝統がある。その種類は豊富で、芸術的にも技術的にも他に比類ない高さを見せ、工芸は我が国文化の特質を示すものとして高く評価されている。しかしながら、その工芸も戦後の混乱とともに非常に苦難の道を歩み、一時は絶滅するかに見えたが、今日における盛んなさまはまことに多岐多様で、かつてない幅広い展開を見せている。

苦心の作品を求める人も無く、いや、それを作る材料すら入手できないような苦難の時代を経て、ようやく昭和三〇年代を迎えようとする頃から工芸家は次第に活発な活動を見せ、その後における一〇余年間は、我が国工芸の一片に花開いた感があり、戦後において最も充実し燃焼した頃と目されている。

陶芸における板谷波山・富本憲吉の両巨頭が共にその晩年を迎えて円熟期にあり、浜田庄司・河井寛次郎や荒川豊蔵・石黒宗磨、漆芸の松田権六、金工の高村豊岡や染織における芹沢銈介・北垣稔次郎・小合友之助等々活躍期にあり、稲大路魯山人等もまた特異な存在として活発な活動を見せ、また今日指導的な立場にある諸大家が青壮期の意欲を燃やした頃であった。

を試みようとして発想したのは、前述のような見地から今日における工芸の隆盛の基を築かれた諸先輩の偉業を偲ぶとともに、我が国現代工芸の胚胎するもの一端を窺い、将来に資しようとしたことに他ならない。

この開館記念展は明春三月一九日まで開催し、五十五人の作家の手になる一五九点の作品を随時陳列換えを行いつつお目にかけることとし、約六〇〇平方メートルの展示室に常時一〇〇余点の作品を展示することとなっている。

僅か六〇〇平方メートル、六室の展示室において前述の意図を集約し展示することは至難のことであったが、この開館記念展において、我が国現代工芸のもつ豊かさや何んらかの胎動の一端を感じて頂ければ幸いである。

このような近代ないし現代の工芸を専門とする国立の美術館を設けたいとする発想を見たのは、我が国の工芸界が一際燃えた昭和三八、九年の頃で、今日総理府青少年対策本部次長の松浦泰次郎氏が当時の文化財保護委員会事務局無形文化遺産課長の職にあつた頃と記憶する。現在、文化庁無形文化遺産課の文化財調査官である柳橋真君も当時同課に在った私と共に巢鴨ブリズン跡や新宿の浄水場跡、そしてこの旧近衛師団司令部跡を調査して歩いたのもこの頃である。当時の文化財保護委員会においては、芸能に関して国立劇場、工芸について国立工芸館を設立しようとする構想があつた。

そしてこの施設は、ただ作品の収集展示にとどまらず、工芸研究者や作家が必要とする資料の収集やその調査研究を行うと同時に実験工房も備え、高度の技術者研修にも役立つせよとする雄大な構想もあつた。漆芸の松田権六氏や陶芸の加藤土師萌氏等は、その必要を説かれた

このことは、明治末年以来の辛酸を尽くし、我が国工芸の本質を問おうと努力した人等の研鑽の成果を示した時期で、戦後を境としてその大きい進展と変化を見せた時点とも言えるものであつた。

またこの頃、京都における若い陶芸家によって結成された走泥社の躍進も目ざましく、その主要メンバーである八木一夫や鈴木治はあいついで海外における国際陶芸展で金賞を獲得し、その前衛的な作品が一躍世の注目するところとなつて、工芸のなかに新しい思潮の興りを察知させたものである。

そしてまた、戦後間もなく海外から導入されたインダストリアルデザインの考え方は、これまでの過飾気味の作風を嫌い、特に会場芸術的なものを排して秀れた意匠と機能を訴え、我が国にクラフト運動を興させている素因ともなつた。特に、これまで考えられていた工芸概念から脱して新しい工芸の存在理由を解明しようとする走泥社の活動は、若い工芸家に多大な影響を与えている。そしてこれらの若い工芸家等は、今日の情報化時代において世界各国の工芸家と相互に影響しあつて、世界の動向に連動して更に進んだ芸域を求め、次第に美術の領域に移行

先鋒であつたと記憶するが、用地を確保することができなかつた等の理由から、遂に折かくの構想も具体化されることはなかつた。

その後一〇余年、旧近衛師団司令部庁舎の保存とからんではいへ、このたび東京国立近代美術館の分室として工芸館の発足を見たことは、これまで工芸について手薄であつた当館としては、ようやく美術館としてその五体を整えたことになるが、工芸界にとつてもまことに意義深いことといふべきであらう。

美術館の性格は、その施設、即ち収蔵庫・研究室・展示室・サービス関係室等の配分によつて左右されるが、展示室の体質もまた館の性格構成に重要な役割を持つている。

工芸館の展示関係の設計を、本館の設計者である谷口吉郎氏の手をわずらわすこととしたのは東京国立近代美術館分室として同じ体質の展示室とし、一体的なものとしたことに他ならない。このことは、安達館長の強い意志によるもので、工芸館の展示室は、本館三階における日本面展示室を基調とし、旧近衛師団司令部庁舎の規格に応じ、近代ないし現代工芸の展示に適するよう工夫されている。

このように重要文化財指定になる初期洋風建築を美術館や博物館として活用しているものは、当初から博物館施設として設計された京都・奈良両国立博物館旧館を除いて、横浜における重要文化財「旧横浜正金銀行本店」の神奈川県立博物館、金沢の「第四高等学校々舎」の石川県立民俗資料館、「福岡の「日本生命福岡支店」の福岡市歴史資料館等がある。しかしながら、これらの施設は文化庁の援助と指導助言は得たとはいへ地方公共団体が事業主体となり、各々その手によって整備され運営されているもので



東京国立近代美術館工芸館・外観

してゆくかの様相を示している。

こうしたことから、今日では現代工芸と美術の区別は無くなつたとし、また工芸にかかわる新しい意義づけが必要であるともされている。そしてこの現象をとらえ、一部には工芸の混乱とし、一方には現代工芸が胚胎する本質的なものとする見方がある。

去る一月一日から公開された工芸館の開館記念展において、「現代日本工芸の秀作」と題し、主として戦後の工芸界に光彩を放つた注目すべき作品を集めて展示するとともに、新しい室内空間における工芸のあり方を示唆する展示

ある。したがって、このたび旧近衛師団司令部庁舎を工芸館としたことは、東京国立近代美術館の分室とはいへ、この種の建物の保存活用工事を初めて文化庁自ら実施したもので、将来においてこのような重要文化財指定建造物の保存と活用に関し、その範ともなるべき重要な意義を持つものと思ふ。

旧近衛師団司令部庁舎は、その外壁と玄関および階段ホールがその重要文化財指定要件となっているが、指定の要件から除外されている旧事務室部分を如何様に改装し、これに工芸館の機能を付与するかということ、そしてまた工芸館としての機能がどれ程この建物に求められるかということの検討が繰返された。公園地とする立地上の、重要文化財とする建築上の、各種の制約のなかにあつて建面積九二九平方メートル総二階建、延一、八五九平方メートルについての活用計画を練つた。外壁、そして玄関・階段ホールは建築当初の様に復原修理され、二階階段ホールに接する小部屋を休憩室とし、観客は所定の動線以外に、この休憩室を経て観客自ら好む方向に進むこともできる動線計画で、階段ホールから右回りとし、第一室(染織等)、第二室・第三室(陶磁)、休憩室、第四室(漆芸等)、第六室(企画)、第五室(金工等)と展示室を配し、原則として第一室から第五室において常設展示を行い、第六室において小規模の企画展示を行うよう計画されている。

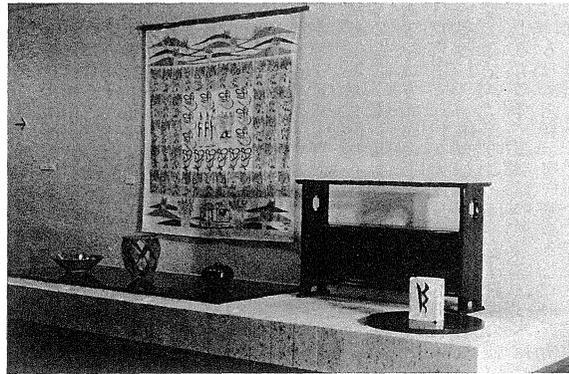
工芸品の観賞はもととも親しみのある展示においてすべきであるし、とりわけ近代ないし現代工芸においては、その都度におけるディスプレイによりそれに適した空間を設定して展示することが望ましいことだが、常設展示とする第一室から第五室までは作品の管理保全の観点か

ら、残念ながら陳列ケースによる展示によらざるを得なかった。かかる陳列ケースによる展示における固さの欠を補うため、第一室の染織展示室には陳列ケースと対する壁前に、幅五米、奥行一・五米の大谷石ブロックによる陳列台をしいつらえ、この上に輪島の塩多慶四郎氏の手になる漆塗の大敷板を置き、その上になる陳列台となる工芸品を露出展示し、壁面に壁掛等を飾って立体的な展示を試み、豊かな気分を味わって頂くよう配慮している。そして、工芸品が常日頃置かれていた状態を示唆する展示を行いたいとする安達館長の意向にそって、第二室の陶磁室の北側に設計者得意の和室風の展示室がしいつらえてあり、また大楠の一枚板に凹座を置いた休息設備がある。一室における大谷石による陳列台とこれらの設備は、展示用語でいう「遊び」であるが、これらの設備によって展示室に実際以上の大きいスケール感を持たせ、観客がゆとりある気分で行き交わることができる効果をもっている。

第六室の企画展示室は約一〇〇平方メートルの小企画展示を行う場所、その都度ディスプレイを行うこととし、陳列ケース・パネル等の展示用収納庫がこれに隣接して設けられている。いま工芸館が保有する工芸作品は、近年その開館準備に収集された三〇余点と、このたびの開館に際して文化庁から移管された四三〇点余がその全てである。そのうち文化庁から移管されたものは、主として戦後工芸界が最も燃焼した時期のもので、先学小山富士夫氏を中心となつて収集され、陶芸家富本憲吉、漆芸家松田権六等の戦後の代表作を揃え、少数とは言えさすがに高い内容を示し、今回の開館記念展の企画を容易にさせて力があつた。

作品の収納力と研究態勢の強化、そしてサ-

ビス関係室の整備は、展示室の計画と共に館の性格を左右する重要な要素で、小規模の施設ではあるが本館計画時の苦い体験を生かし、特に倉庫部分と研究室の確保に重点が置かれ、一階右翼は殆ど荷解室・取蔵庫にあてられ、陶磁・漆芸・金工・染織の四取蔵庫とし、それぞれの類似の作品を収納することとしている。その面積は一六八平方メートルで展示面積の二八％に当たるが、古い建物特有の天井高の高いことを利用し、中二階を設けて収納力の増加を計り、展示面積比四〇％程度とする計画がある。建物の左半分は、出札を含めた管理事務室、研究室、



陳列ケースのない立体的な展示で豊かな気分が味わえる

資料室、調査室、機械室、看手控室等になっており、研究室には陶磁・漆工・金工・染織係及び現代における新造形による工芸や意匠・技法の調査研究を行う意匠係の五係、写真・図書・資料等の収集整理とサービスを行う工芸資料係が配備できる空間が確保され、作家や研究者の特別観覧や研究に対応すると同時に、写場や応接室とする多目的だがサービス関連室としての調査室がある。

今日のところでは当面開館に必要な最少限度の要員である。今後職員の充実とあいまって展示内容の充実もさることながら、作家や研究者の研究にかかわる便宜供の充実を計ることにより、工芸館も社会における貴重な歯車としての機能を発揮することであろう。

営団地下鉄、東西線竹橋で下車し、東京国立近代美術館本館、国立公文書館の前を経て、左手に皇居の森を眺めながら爪先上りの紀伊国坂を進み、桜並木の手きるところ皇居乾門と対峙して工芸館がある。尖塔を持つ赤煉瓦二階建のこの建物は、北の丸公園西南隅に位置し、西に千鳥ヶ淵、北東に公園の森をひかえている。都内においては希に見る自然環境に恵まれて、三月末の桜の蕾のふくらむ頃から公孫樹の黄ばむ一二月末までが最も美しい。その静かなたたずまいに映える赤煉瓦の建物を評して、私は東京都ロンドン村と呼んでいるが、こうした美しい環境の中にある工芸館、その建物が由緒ある重要文化財「旧近衛師団司令部庁舎」とあつてか、開館以来、予想以上の来館者を迎え、その数は本館のそれをしのぎ、総工費八億円余、五か年の工事に従事した人々を安堵させ、職員の前将来における責任と意欲をわかせている。

編集後記

○巻頭に掲げた「鳥と文化、その復権について」を書いて頂いた中西樞堂先生は、昨年十一月文化功労者になられている。従来、芸術・学術の各分野から文化功労者は選出されていたが、鳥類保護、動物文学という分野からの受賞は初めてである。

○昭和五十一年には文部省関係で四つの大きな国立の教育文化施設が開館した。十月・大阪に国立国際美術館と埼玉県に国立婦人教育会館、十一月・東京に国立近代美術館工芸館と大阪に国立民族学博物館である。今月号では、後者二館の設立の目的や意義についてそれぞれ解説して頂いた。

○本号から各地に伝わる年中行事の代表的なものを「民俗歳時記シリーズ」として解説していただくことにした。(K)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課
TEL(03)3681-2411(代表)

「文化庁月報」二月号

(通巻第一二三号)
昭和53年2月25日印刷・発行

編集文化庁

〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号
発行所 株式会社 きょうせい

本社 〒100東京都中央区銀座7丁目4番12号

営業所 〒100東京都新宿区西五軒52番地

電話 (03)2681-2411(代表)

振替口座 東京 九一六一番

印刷所 協行政学会印刷所

定価・一五〇円(送料二九円)
年間購読料 一、八〇〇円